



縄文ムラのイメージ

縄文王国の家とムラ

人々が家を立て、ムラ(集落のこと)に定住する暮らしが始まった縄文時代。ムラではどのような暮らしがあったのでしょうか。縄文人の暮らしぶりや、美のセンス、心の中ものぞいてみましょう。

どんな家に暮らしていたの？

縄文人たちは、地面を円形や方形に掘りくぼめ、丸木の柱を立て、その上に茅や草葺の屋根をかけた、半地下式の「竪穴住居」に暮らしていました。穴の大きさや深さ、形、柱の数や位置は時期によってバリエーションがあります。

縄文時代中期の竪穴住居は、柱穴の位置や炉の位置など家の構造がある程度かたまってゆきます。



復元された竪穴住居
県立考古博物館構内



環状に住居が並んでいる様子がよくわかります。
梅之木遺跡(北杜市)



長い年月の間建替えられた結果、住居跡同士が重なり合って発見されます。
釈迦堂遺跡(笛吹市 甲州市)

ムラ(集落)

縄文のムラは、住居のほかに、貯蔵穴やお墓とみられる穴、屋外炉などの調理施設、祭祀施設、廃棄施設、広場や道などで構成されています。中期には中央の広場を囲むように穴や住居が輪っか状にめぐる「環状集落」といわれるムラの形となります。

一度に営まれた住居数は通常4～6軒程度で、何度も建替えたりした結果、遺跡からは何十年、何百年分の家の跡がまとまって発見されることもあります。

1棟につき、4～5人で暮らしていたとみられるので、ひとつのムラで20～30人が暮らしていたようです。



貯蔵穴
石ノ坪遺跡(韮崎市)



縄文の道:水場へ向かう道
梅之木遺跡(北杜市)



復元住居と祭祀施設
金生遺跡(北杜市)